

“支配”からの卒業

増田 英明

医療福祉ジャーナリズム分野

M3・13S2036

東京青山キャンパス

平成 27 年度・春学期

医療福祉ジャーナリズム特論

お笑い芸人が大学教授になると...

古川和稔さん

停学・留年・高校中退、大学除籍、お笑いコンビ解散、芸人引退。
20代で、ここまで経験する人は、なかなかいません。
しかし、かずさんに諦めの様子は全くなかったように思います。
その後、愛する人のために就職、そして結婚。
介護現場の経験を積み、修士号・博士号を取得、そして大学教授就任。
ドキュメンタリー映画にしたいと思うくらいの人生です。

何が、かずさんをそうさせたのか。
まず、とにかく...とにかく、人柄がいいということ。
くよくよせずに前向きで、楽天的な人柄があつてこそだと思います。
そして、人とひととの関係を大事にしておられたということ。
人の笑顔が見たい、笑顔にしたいと思う気持ちは、言い換えればホスピタリティ。
子どもの頃の自分をお調子者だったと振り返るかずさんですが、
その心の奥底にはおもてなしの心があつたと思います。

そのおもてなしの心が目指す先にあるもの...それは水平の関係性ではないでしょうか。
垂直や上下ではない関係性。
和さんと同世代、伝説のシンガーソングライター尾崎豊の世界観で言えば、
“支配からの卒業”ではないでしょうか。
かずさん自身、利用者さんの本当の笑顔とは何か、自立支援とは何か、
問題意識を持っておられます。

とかく人は、ひとのために、相手のためにという気持ちが強くなればなるほど、
自分の立ち位置が見えなくなり、手段の目的化が進むことがあるようです。
知らず知らずのうちに上下の関係性をつくってしまい、
支援という名のもと、介護する側の理論に都合よく置き換えられてしまう。
ケアされる本人のためになるはずのエビデンスが、本人の気持ちにそぐわない時、
かえって本人を苦しめる要因となり、それ発する本人のナラティブが全く無視されてしまう。
これは、まさに支配という関係性以外のなにものでもありません

かずさんは、“当事者本位”のケアに問題意識を持っておられます。
何事にも代えがたい人柄の良さと、持ち前のおもてなしの心を存分に発揮されて、
エビデンスとナラティブが程よく塩梅されたケアの実現を目指していただきたい。
そして、人の心が分かる、人の心に寄り添うことができる、真の専門職を育てていただきたい。
これからのますますのご活躍をお祈りいたします。

かずさんにお会いできたご縁に、心から感謝いたします。(了)